

岩手と西和賀、そして私の未来

高鷹 紗貴

「家業の旅館を継ぎ『田舎』の観光業に貢献する。」先日、達増知事が私たちの学校に出前授業でいらっしゃったとき、私が示した、「十年後の私」像です。

私は、岩手県の西和賀町に住んでいます。西和賀町と聞いてどこに位置するのか、どんな町なのか、思い浮かべられる人が岩手県の中にどれくらいいるでしょうか。私が西和賀町を離れ、盛岡白百合学園高等学校に入学し、周りの友人や先生など、様々な人と関わっている中でも、西和賀を知っている人がほんの少ししかいないことを実感しました。

そんな西和賀町で両親は、温泉旅館を営んでおります。西和賀町が大好きで、多くのお客様がこの町に来ていただけるようにと日々頑張っています。去年は、地震があって、お客様が大分減ったと言っていました。たった、七室しかない家でさえ、例年より三十パーセントもお客様が減ったのだから、大きな旅館は、大打撃だったのでしょう。それでも、両親は前向きに、新館を建設中です。今春オープンに向けて着々と進めています。寮生活の私は、週末家に帰るとどんどん工事が進んでいる新館を見るのがとても楽しみです。

「自然がある、温泉がある、雪がある。これは、確かに貴重な資源だけれど、日本全国あちこちでもアピールできるフレーズだ。岩手でしかないもの、西和賀でしかないもの、それをお客様に提供したい」と、両親は一生懸命考えています。

地元をアピールするために私は、岩手、西和賀でしかとれない食材を使った料理をお客様に提供するために、この土地にはどんな食材があるのか、どのように手にいれるかや、高齢化が進んでいる中で、田舎にいても不自由なく過ごせるバリアフリーな環境の旅館をつくるために、どのようにすればいいのかなど、アピールできるところを増やせるように考え、展開していきたいです。そうすれば、岩手の、西和賀の、あの旅館に泊まりに行こうと、たくさんの人達が「ここでなければならぬ」と来てくれるでしょう。「同じ町のあるこの旅館にあんなにお客さんが来るようになるのなら、うちの旅館だってできるんじゃないか」と、他の旅館も頑張るでしょう。そうすれば、この町全体が活気づいて、元気になることでしょう。そんなことを考えると、うきうきしてきます。

私は、春から東京の大学へ進学します。文学科で、日本の昔話や、民話、宮沢賢治のことなどを深く勉強してみたいと思って進学することにしました。また、西和賀町から出て、盛岡に住んだことによって西和賀の良いところ、悪いところに気づいたように、日本の首都である東京に住むことで、東京から岩手県を客観的に見つめていきたいと思えます。四年後大学生活を終え、岩手に戻ってきたときに、岩手県民として良いところをもっと良く、改善しなければいけないところを改善し、いい町、いい県へと築き上げる一人でありたいと思っています。そして、東京の人達が、岩手にどんなところを求めているのか、どんな岩手に来たくなるのか探してきて、両親の経営する新しい旅館に、より多くのお客様が来てくれるように協力したいと思えます。

「岩手？ 知ってる、知ってる。」

「西和賀？ 知ってる、知ってる。」

十年後、たくさんの人達がそう言ってくれる日になっていたら嬉しいです。そこで、今両親以上に西和賀、そして岩手を好きで、前向きに働いている私がいること。それが、私の夢です。